

博士セミナー開催報告

博士セミナー

3月29日の午後、名古屋大学で行われた博士セミナーでは、東レの長瀬（人材交流省委員会委員長）から、これからのグローバル化の流れの中で企業が博士を求めている背景、企業が求めている博士に必要な基礎力、グローバル力、専門能力、課題設定能力等についての講演を行った。その後、3部構成でパネルディスカッションを行い、それぞれのパネルディスカッションでは、パネラーと会場の間で熱心な討論が行われた。

<講演要旨>

現在20代の学生が、世の中の中心を担う40年後にはグローバル化、世界市場の中心が新興国に移ることなどから、日本企業の研究所の海外進出が加速される。このため、技術系企業若手が海外で活躍する機会が増え、グローバル能力、博士という肩書きが一層望まれるようになる。また、現在世界が直面する課題は、企業、アカデミアの枠を外して挑戦する課題であるとともに、企業の研究においても最先端のサイエンスが不可欠になることから、最先端のサイエンスを身につけた博士が求められる。

このような背景から化学系企業の博士採用率は増加しており、技術系採用数のうち10%以上が博士号取得者となっている。ただし、社会で活躍するためには、高度の専門力、グローバル能力以外に、幅の広い基礎力（化学以外の数学、物理学等）、人文科学の素養をベースとした文理融合的な考え方も必要と考える。ここで間違いなく言えることは、新しいことにチャレンジしていく意欲が何にもまして重要である。

パネルディスカッション

(1)「企業はこんな博士を求めている」
(司会：東レ 長瀬)

博士に求められる能力としては、俯瞰力、方法論を示すことができること、さらにはコミュニケーション能力（自分がやりたいことを相手に説得できる能力、相手の立場を踏まえて、相手に理解してもらえる能力）が必要であるとの意見が出た。学生からは、企業が求める人材になるためのプログラムの提供といった要望も出された（各大学での取り組み、日化協が進めている化学人材育成PG等があるが、一層の取り組みが必要かもしれない）。



(2)「博士でしか得られないもの」(司会：早稲田大学 朝日教授)

企業では取得できず、大学でしか得られないものを吸収することが重要であり、それが博士のステータスに繋がっていくとの考えが出された。このようなものとしては、学術的専門性、アカデミアでの人脈の形成、海外アカデミアとの人脈形成といったものが挙げられた。

(3)「企業でも活躍できるポストドク」(司会：東芝 上野氏)

ポストドクは転職といった考えを持つべきであり、共同研究、リクルート、公募等を通して就職を考える必要がある。ポストドクであれば、海外のファンドを利用して海外で働くことは良い経験になる。自らがファンドを取ることが、良い経験となるといった議論があった。

[産学交流委員会・人材交流小委員会委員長・長瀬公一（東レ）]

© 2014 The Chemical Society of Japan